

# 滋賀県全国大会を終えて

江別市立江別第二中学校

男子バスケットボール部顧問 塚本 総朗

## はじめに

全道大会の時もそうでしたが、まず、今回江別第二中学校が昨年に引き続き全国大会に参加でき、またその大会で予選リーグを勝ち抜いてのベスト16という結果を残すことができたのは、石狩管内の先生方をはじめ、多くのお世話になった先生方、そして保護者のみなさまなど、周りの人々の大きな支えがあったからでした。本当にどうもありがとうございました。

昨年の全道大会からお世話になった川辺トレーナーには、今年の全国大会でもお世話になりました。去年から関わりを持っていただいていることから、選手たちとも気軽にコミュニケーションが取れ、また試合会場では選手たちのアップから盛り上げ、子どもたちの心身のケアに尽力して下さいました。また、今年も主力がケガをしている中、大変助けられました。本当にありがとうございました。

## 去年と今年の違い

昨年全国大会に出場した際は、石狩管内でも比較的体格に恵まれ（とは言えやはり小さかったですが…）、リバウンドも比較的取れている試合が多くありました。今年のチームは何ととってもとにかく小さかったです。出場メンバーの平均身長が160cmでした（ベンチ全員で）。スタートこそ170cm台が3枚いましたが、メンバーチェンジで入ってくる6人目が160cmと、高さについてはとても苦しいチームでした。いつも試合で苦くなるのはリバウンドが取れなくなるときで、常にリバウンドの問題がチームにつきまといまいました。ボックスアウトをしても、簡単に後ろから取られてしまったり、ボックスアウトを怠って取られる場面も何度もありました。小さいチームなので上での勝負はどうしても苦しい。そこで、下のポジション取りは負けないように練習してきました。しかし、今思えばこのポジション争い（体を張ったプレー）を徹底して練習しなかったせいで、全国大会で選手たちに苦しい思いをさせてしまったと反省しております。

今年のチームの武器は、スピードだけでした。リバウンドを取ったらすぐに3線速攻を作り、できるだけ相手がバックコートにかける人数が少ない内に攻めきってしまう。そんなスタイルでバスケットをしてきました。市内大会、管内大会、全道大会、全国大会と、どのステージにおいても自分たちの“走るバスケット”のスタイルを貫いてきたつもりです（至らないところは多々ありましたが…）。シュート力があるわけでもない、平均身長が160cmのチームが全道大会で準優勝まで勝ち上がり、全国大会でも予選リーグを勝ち抜いてくれたのは、選手たちが本当によく努力し“身長”というハンデを運動量でカバーできたからだと思っています。また、その選手たちを支えて下さった保護者の方々、そして江別第二中学校男子バスケットボール部に関わって下さった先生方のおかげがとても大きかったです。本当に感謝しております。

## 春季管内大会での敗戦

今年は、春季大会服部杯でベスト8のところ恵み野中学校に残り1秒で最後のシュートを決められ敗れました。あそこでの敗戦が自分たちにとってとても大きな意味をなすゲームでした。選手たちの誰もが“まさか自分たちが恵み野中学校に負けるわけがない”と思っていたはずでした。指導者である自分も「流れが悪くても勝てる」と思い込んでいました。振り返ってみると、恵み野の選手たちの集中力は目を見張るものがありました。ですが二中にとっては選手、監督を含めこの精神的な甘さが敗戦を招いたのだと思います。多くの方々からの落胆の声も聞かれました。ただただ残念な結果で、自分の指導力不足を痛感しました。

それからの練習では、今のままでは管内大会も勝ち抜けないと自覚し（選手も自分も）もう一度基本的な走

り込みの絶対量を増やし、どこにも走り負けないチームを目指しました。DFについても以下の約束をもう一度確認しました。

- ① ボールマンは1アームよりも近づき、足元まで入ってディレクションをかける
- ② 2線目はクローズスタンスのディナイで簡単にボールを持たせない
- ③ 3線目はオープンスタンスで必ずヘルプポジションに入り、ローテーションでカバーダウンをする
- ④ ローテーションについても、誰がボールにでるのかDFの約束を明確化する

シュートについても少しでも確率の低さをカバーできるよう、シューティングメニューも多く取り入れました。練習内容もさることながら、練習に対する意識が大きく変わったことが、敗戦から得た何よりも収穫でした。

## 大会に向けて

去年のレポートにも書いたのですが、基本を大切にしなければ、上の方へいけない（難しい作戦ではなく、ドリブル・ストップ・ピボット・バウンズパスなど、基本が試合の局面で重要になる）ということ去年からの反省で生かし、細かい戦術よりも自分たちはそういった基本を多く練習してきました。江別第二中学校が今年小さい選手たちで管内優勝を果たし、全道準優勝にたどり着いたのは、基本的なことを誰もが大切に感じてプレーしたからだと思っております（まだまだ至らないところだらけですが…）。去年山の手高校、旭川大学高校と、北海道を代表する高校の先生方から学んだことが、今年の選手たちの中にも生きていました。

また、“強いプレー”も意識していたつもりでしたが、全国大会では“強さ”のレベルが違いました。詳しくは後で述べたいと思います。

“バスケットのプレー外”のことですが、キャプテンの船木がダラダラした行動が嫌いな性格ということもあり、集合はダッシュ、荷物の置き方、並べ方についてもよく上級生が下級生に指導をしていました。今年の1年生にも何度も“一バスケットボール選手である前に、一中学生であること”ということをするさいほど伝え、日常で起こりうるあらゆることをバスケットボールと関わらせて話をしています。“次に何が起こるのか予測すること”、“その時の自分の対応を準備しておくこと”。多くの場面でバスケットボールを意識して生活していたと思います。今年のチームは接戦になると力を発揮できるチームでした。彼らの経験もありますが、いろんなことを想定する準備の力が、接戦で力を発揮できるチームになったと考えています。

## 大会本番

### 予選リーグ① vs 島根（中国1位）

予選リーグ1回戦は中国地方1位の島根中学校と対戦しました。チームに1人180cmオーバーのシューターが1人いました。そのシューターだけでなく、チーム全員非常に体格が良く（身長もそうですが、筋肉質で大人のような体をしている）まったく当たり負けをしない体つきでした。相手のキャプテン④は身長こそ170cmそこそこなのですが、その体格を生かし、力強いプレーで果敢にゴールを狙い、インサイドの起点になってプレーし、自分で得点を取りにきたり、他のシューターにパスをまいたり、伸び伸びとプレーしていました。第二中学校としてはどうしてもその④のところを抑えに行かざるを得なくなり、インサイドの④を止めにいき、④は止められるのですが、他の選手に得点を取られるケースが多くなりました。

スピードで勝る第二中学校は、リバウンドを取れると④船木、⑤原田、⑩濱崎と3人がすぐに走り出し、速いトランジションの中で速攻をどんどん出していました。前半戦一時は10点近くリードされていたのですが、相手のオフェンスをよく抑え4点差まで詰めました。しかし、ここで⑦田中がファールトラブルに見舞われてしまい（第2Q途中で4回）ベンチに下げたところで、すかさずまた10点のリードを奪われてしまいました。後半に入り、⑥長谷川、⑦田中とスタートのインサイド陣を欠いて戦い、一時は⑩濱崎の活躍で5点差まで詰め寄るものの、相手のタイムアウトですかさず流れを切られ、なかなか追いつくことができませんでし

た。試合は結局 62-76 で負けてしまいましたが、4点差、5点差に詰まった場面が何度もあったにもかかわらず、自分たちのイージーシュートミスで逃したり、相手の勝負強さでまた引き離されたりと、全国大会のレベルでは自分たちの勝負強さを発揮することはできませんでした。

## 予選リーグ② vs 本丸（北信越2位）

予選リーグ2回戦は前年度の全国チャンピオン、新潟県の本丸中学校と対戦しました。相手エースの⑤秋山君は北海道カップ、6月の新潟遠征でも1人で30点くらい取ってしまうような優れたシューターでした。彼が攻めてくるのはわかっていたので、第二中のDFのエース⑤原田をフェイスでつかせました。“ドライブはされてもチームでカバーできる。絶対に簡単に外からのシュートを打たせないように、間合いを空けないこと”原田にそう指示しました。これが見事にあたり、⑤の得点をシャットアウトしました。こちらの攻めは得意の速攻はもちろんのこと、普段ガードをしている④船木をインサイドにおき、④船木、⑥長谷川の2枚を中心にインサイドを攻めて得点を取りに行きました。また、初戦の島根戦でリバウンドの課題が残っていたので、選手たちのリバウンドに対する意識は高く、183cmの相手センターにも簡単にリバウンドを取らせませんでした。こちらは何度も速攻やインサイドを使いゴールに近い位置から確率の高いシュートを狙う一方で、相手は3ポイントを主体として攻めてきていました。確かに第二中学校に比べて外角シュートの確率は圧倒的に高く、この試合でも合計8本の3ポイントを決められました。しかし、その外角シュートのリバウンドをしっかりと自分たちで確保し、相手に流れを渡さなかったのがこの試合の勝因でした。第4Qの残り1秒まで攻め続け、66-52で勝利することができました。去年の広島全国大会でも当たり、完敗しているチームでした。今年は全国大会という大きな舞台で去年の雪辱を果たすことができました。

## 全国の強豪チームとの差

全国大会でレベルの違いを痛感したことは、第一に体の強さ、つまりはフィジカルで負けているということでした。DFでの当たり、リバウンド、ルーズボールでの当たり、北海道のレベルと全国のレベルでは圧倒的に違いを感じました。全道大会においても、体の強さが明らかに自分たちがトップレベルであったかということ考えると、疑問に感じています。ドライブに行ってもレイアップに持っていかうとしても、DFの激しい当たりに負けて強くレイアップに行けなかったり、リバウンド争いに関しては、“それはファールでは？”というものさえ、笛が鳴りませんでした（負けた試合はちょっと鳴らなさすぎの気もしましたが…）。ただ、中学生のレベルであっても日本のトップレベルではそれくらい強いプレーをしなければ通用しないということ、身を以て体験しました。

また、シュート力についても自分たちのチームと、優勝した大石中学校の選手では全く違いました。第二中学校は1試合目こそ、体力も満タンで脚も残っており、シュートも入りますが（上手ではありませんが…）2試合目の4Qになると、運動量が落ち、シュート力もガクンと落ちてしまいます。ところが全国で勝ち上がるチームは2試合目の4Qでも1試合目の1Qかと思えるほどの集中力と、シュート力でした。まず、どの選手でもミドルシュートの確率がとても高い。8割は入っているのでは？と思うくらいよく入りました。運動量も落ちず、あれだけの脚が残っていれば、シュートも打てるのが納得できるほどのスタミナでした。

全国上位の強豪チームとは上に挙げたように、①フィジカルの強さ ②シュート力 ③スタミナと集中力がやはり第二中学校よりもはるかに優れていました。スピードは負けていなかったのですが、やはりスピードをどうやって生かすか、スピードを生かすための土台は何が必要か、ということを考えさせられた全国大会になりました。

## 他のスタッフ、保護者の協力

全国大会に向けて、今年もたくさんの方々のお世話になりました。去年は小笠原教頭先生という強力なベンチスタッフがいて下さいましたが、今年はいませんでした。今年から二中のベンチに入って下さったのが、木田先生で練習中から一緒に生徒と関わり、ベンチでも大変心強かったです。タイムアウトやメンバーチェンジについても試合前や練習後などにいろいろと話し合いを持ち、協力してチームに関わってくださることができました。1人では見えづらいところでも、2人だとやはり気がつくものだととてもありがたみを感じました。また、半澤先生につきましてはマネージャーを務めていただき、選手のボディケアを中心に、補食のタイミングやどういふものを摂取したらよいかなど、チームの縁の下の力持ちとして支えていただきました。チームのトレーナーとしては、昨年引き続き釧路みなみ病院の川辺さんをお願いいたしました。昨年からのつきあいもあり、選手たちとのコミュニケーションはかなり密にとっていただくことができました。大浦先生につきましては、今年も引率責任者になってくださり、様々なところでお世話になりました。

選手の保護者につきましては、遠征、練習試合、さらには全国大会のあいさつ回りなど、大変多くのところでお世話になりました。今年も昨年以上の苦労があったらうと感じております。教頭先生を含め、大変お世話になりました。

本当にチーム内に心強いスタッフ、理解のある保護者の皆様がいてくれたからこそこの全国大会となりました。ただ感謝する次第であります。どうもありがとうございました。

## 最後に

今年も多くの人へ感謝の全国大会でした。この春には東日本大震災もあり、東北地方のチームには練習会場が無かったり、また家庭が練習できるような環境になかったりと、自分たちと比べてバスケットボールをするにははるかに厳しい状況にあったチームがたくさんあったと思います。その中でも自分たちの大好きなバスケットボールをさせてくれている自分たちの保護者に感謝。練習をさせてくれる学校に感謝。先生に感謝。自分たちのバスケットの力をここまで高めてくれた、石狩管内のライバルたちに感謝。ライバルを育ててくれた指導者に感謝。全国大会を開催してくれた滋賀県のバスケットに関わって下さっている方々に感謝。

自分につきましては、二年連続で全国大会まで行ってくれた選手たちに本当に感謝でした。

全国大会では専門委員長の野崎先生をはじめ、札幌の秀島先生、丸谷先生、山崎先生にも応援していただきました。わざわざ遠いところまで駆けつけていただき本当に感謝しております。

今年も東海大四中学校が全国3位という素晴らしい成績を残し、自分たちはそこまでは勝ち上がりませんがベスト16という結果で帰って来ました。まだまだ自分たちの至らないところは多々ありますが、北海道のレベルも上がっていると信じています。そして全国にも北海道はレベルが高い、ということを示すことができたと思います(江別第二はもう一つ勝ち上がって東海と準々決勝を戦いたかったのですが…)。“強い石狩”を支えるために、これからも選手たちと一緒にバスケットボールを通して人間性を磨き、より高いレベルでバスケットボールができるように努力していこうと思います。新チームは今年のチームより更に小さくなりますが、今回の全国大会で“小さなチームをいかにして勝たせるか”ということを追求め、小さくても戦えるということ、ずっと追求していきたいと思っています。

最後に、今まで自分と江別第二中学校に関わってくださったすべての人にもう一度感謝、御礼申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

江別市立江別第二中学校

男子バスケットボール部顧問

塚本 総朗